猿投窯における土管の生産について

浅　田　員　由

1. はじめに

昭和57年に、名古屋市名東区と愛知郡日進町の境界上に位置する、岩崎77号窯が発掘調査された。この窯の周辺は、亜炭の採掘によって掘りかえされており、窯の残存状態が悪く、窯体は確認されなかった。(注1) また、灰原も一部を残すだけで、出土資料も多くなかったが、特殊な製品がみつかった。それは、土管状の須恵器である。

岩崎77号窯は、高台のある杯身と宝珠鈕にかえりのついた蓋をもつ杯と、古墳時代からの伝統をひく、杯身に受けのある蓋杯の両者が混在して出土する窯である。他の出土品には、脚が低い榛状の高杯や円面硯などがあり、岩崎17号窯式に比定されるものである。この出土資料の中に、土管状の須恵器がみられたのである。その出土量は、甕胴部に次ぐもので、かなり大量に生産されたことが知られる。

この土管状の須恵器は、長さ60㎝くらいが標準の寸法で、片方の端が狭くなった、細長い砲弾型をしている。広い方の端は、径20㎝くらいで、狭い方の端は、径5㎝ほどである。この狭い方の端を広い方の端に差し込むと、20㎝ほど嚙み合って、しっかりと接合される。これを連続して接合すれば、充分に土管の用をなす製品である。そこで、この土管状須恵器を土管（実際には須恵質であるため陶管とすべきかもしれないが、ここでは土管と呼ぶことにする）と特定する。

猿投窯において、土管の出土は、岩崎77号窯が唯一であり、寺院等の建築遺跡からも、この地方ではまだ例がない。(注2) 全国的にみても、飛鳥地方に少数例がみられるだけで、その出土はきわめて少ない。こうした、きわめて特殊な製品である土管が、猿投窯において生産された背景について、若干の考察を行い、あわせて猿投窯における窯業生産の一側面を考えるものとする。

2. 古代の土管

土管は、上水であれ下水であれ、通水の機能をもつもので、その使用については、建築的、土木的な条件の伴うものである。つまり、人口の密集した生活環境の改善に必要とされる設備で、いわば都市の機能の一部となるものといえる。勿論、古来から、通水の施設としては、敷石の暗渠や木樋などが使用されてきている。これは、古代最大の都市である平城京から、巨大な木樋や敷石排水施設がみつかっていることからも明らかである。日本のように、都市が城壁をもたずに開放的であり、湿潤な気候で水源の確保が容易である場合には、通水の施設はあまり発達しないのかもしれない。いずれにせよ、通水管として土管が登場するのは、7世紀後半の飛鳥地方においてである。

飛鳥地方は、6世紀以降の政治の中心地であり、飛鳥寺建立の後、次々と大寺院が建設されたところであり、また都市化が最も進んだ地域でもある。ここで、日本で最初の土管が使用されたのは当然といえる。しかし、その例は多くない。今、知られている飛鳥地方における土管の出土地は次のとおりである。(注3)

1. 川原寺跡
2. 和田廃寺跡
3. 飛鳥坐神社北接地

4. 水泥古墳

5. 藤原宮跡

6. 酒船石東方地

これらの土管は、いずれも瓦質である。また、川原寺や和田廃寺の調査で明らかなように、暗渠排水管として使用されている。

7世紀の飛鳥地方は、日本の文化の中心でもあり、さまざまな渡来技術が移入され、建築や土木工事が行われていた。特に、最近の調査で明らかにされつつある、庭園の噴水施設や漏刻台など、水を利用した建築物の多いことが一つの特徴である。こうした水の利用による施設は、従来の、排水施設とは異なる新しい技術によるものである。特に、漏刻台のように高い精度を要求される建築工事においては、通水の技術はきわめて高度なものであったに違いない。飛鳥地方における土管の使用は、こうした一連の技術体系の中にあらわれてくるのである。

岩崎77号窯にみられる土管生産とこれら飛鳥地方出土の土管との直接的な関係については、今の時点では明らかにできない。むしろ、両者の間には、形態的な差異が大きい。それは次の3点である。

① 須恵質と土師質

② 紐づくりと型笵づくり

③ 小型と大型

①と②は、同じことを示しているのかもしれない。それは、土管の製作者が、須恵工人と瓦工人であれば、当然、紐づくりで須恵質の土管と、型笵づくりで土師質の土管になるからである。また、③については、使用上の差であるかもしれない。飛鳥地方の、明らかに排水管とされるものは、径が50㎝ほどもあり、充分、排水管として使用できるとおもわれるが、岩崎77号窯のものは、最も狭い内径で1.5～2㎝ほどしかなく、砂や泥で簡単に詰りそうである。むしろ、これは上水用の通水管と考えるべきものかもしれない。勿論、資料も少なく、特に使用例が不明であることから断定することはできない。

このように、飛鳥地方の土管と岩崎77号窯の土管の差異は大きいが、その使用された年代と生産された年代がほぼ一致することは、両者の密接な関連を窺わせる。それは、猿投窯が、この岩崎77号窯、つまりは7世紀後半代を一つの契機として、地方の須恵器窯から日本最大の窯業地へと発展していく過程をも示しているようにおもわれる。

5世紀末頃、名古屋市の東部丘陵東山地区で始まった猿投窯は、東山111号窯、東山218号窯、東山11号窯、東山10号窯など(注4)初期須恵器の生産を連続して続け、窯業生産を確立するが、この段階においては、尾張氏の部民生産の域を越える規模のものではなかった。また、5世紀末から7世紀初頭までの須恵器生産は、一部の例外を除いては、東山地区に限定されていた。それも、東山111号窯の築窯された周辺地域の狭い範囲に限られていた。それが、東の植田川(注5)を越えて、新たな展開をみせるのは、7世紀に入ってからのことである。特に、急激な築窯数が増え、大規模な窯業生産が展開されるのは、岩崎17号窯式の時期、つまりは、7世紀後半代のことである。岩崎77号窯において土管が生産されたのは、まさにこの時期である。

3. 古代の寺院

7世紀の中葉から後半にかけては、古代史上最大の変革のあった時である。遣隋使の派遣には

じまり、大化の改新、白村江の敗戦、壬申の乱に至るこの半世紀は、日本が漸く古代国家として成立し、中国を中心とする東アジア世界での位置を固定化する激動の時である。それはまた、国内的にも急激な変化をひき起す時で、古墳時代以来の権威が崩壊し、新しい秩序が生まれようとしていた。その一つのあらわれが、仏教の受容であり、それに伴う寺院建築である。それまでの最大の建築物は古墳であったが、飛鳥寺の建築によって、寺院建築がそれにとって代わる。そして、飛鳥寺以降、中央の有力な氏族によって、次々と大寺院が建立され、飛鳥地方は、まさに都市の景観を備えるものとなっていった。この変化は、当然地方にも及び、地方の有力な豪族によって寺院が建設された。しかし、寺院建築は、当時の技術からみれば想像を絶するもので、中央との密接な関係において初めて可能となるものである。

尾張で最初に建立された寺院は、現在のところ、一宮市の長福寺と名古屋市の元興寺と考えられている。いずれも、大化の改新以後、壬申の乱前後創建とされている。前者は、尾張国府に近く、尾張北部の中央に位置しており、後者は、尾張氏の本貫地、熱田社の近くにあり、いずれも中央政権との結びつきの濃い、有力氏族によって成立したものである。この寺院の建立には、壬申の乱前後の政治状況が大きく影響している。このことは、美濃における弥勒廃寺の成立からみても明らかである。(注6)

弥勒廃寺は、壬申の乱に非常な功績をあげた、身毛君氏によって建立されたもので、壬申の乱による論功行賞を誇り、戦死者の鎮魂を目的としたものであろう。美濃における寺院の成立は、ほとんどこの時期に集中している。これは、美濃が、壬申の乱に果した役割を考えれば当然のことといえよう。尾張における寺院の創建についても、ほぼ同様の経過によるものであろう。少なくとも、壬申の乱における尾張の功績は、美濃に劣らないものであった。それだけに、長福寺及び元興寺の成立についても、弥勒廃寺同様に、壬申の乱後の政治との密接なかかわりが考えられるのである。そして、弥勒廃寺が、飛鳥の川原寺と深い関係のもとに成立しているとされているように、長福寺や元興寺についても、飛鳥の寺院との密接な関係が推定される。ここに、岩崎77号窯における、土管の焼成の意味があるのではなかろうか。(注7)

尾張は、長福寺、元興寺を最初にして、かなりの白鳳期の寺院が存在している。しかし、現在知られている白鳳期の寺院は、ほとんどが国衙近辺に集中している。特に、尾張最大の古墳を築いた地域を中心にして設けられた、愛智郡内には、元興寺が知られるだけで、他に白鳳期の寺院はみつかっていない。これは、愛智郡が、名古屋市の中心部を占めていて、都市開発による消滅が激しかったことを考慮したとしても、なお差の大きいことを示している。このことは一体何を物語るのであろうか。

尾張の古代寺院の分布は、尾張を2分して流れる庄内川の南と北では、著しい差がある。それは、尾張最大の古墳、断夫山古墳を築いた勢力、つまりは尾張氏と考えられるが、この尾張氏の本拠ともいえる、愛智郡と山田郡には、数ケ寺がみられるだけであるのに対し、国府の設置された中島郡を中心に、丹羽郡、春日部郡等に多数の寺院が集中しているということでもある。これは、古墳のあり方からみても、両地域の生産性の問題ではなく、むしろ、両地域の豪族の成立にかかわる問題である。つまり、庄内川以北の北部尾張には、丹羽県主、甚目氏、小塞氏など、多くの氏族が文献に名をとどめているように、小規模な地域を支配する豪族が多くみられる。これらの小豪族が、壬申の乱による功績により、その基盤を確立し、氏寺としての寺院を建立した(注8)

ものであろう。しかし、尾張南部では、古墳時代以来の強大な権力を有する尾張氏によって、郡域の一円支配が行われていて、それと対抗できるほどの氏族が存在しなかったため、尾張氏の本宗、支族あわせて、せいぜい数ケ寺が建立されたにすぎないと考えられるのである。この尾張南部における最も古い寺院が、

① 元興寺　（名古屋市中区正木町
　　愛智郡の中心地、熱田社の近辺）

② 大高廃寺（名古屋市緑区大高町
　　愛智郡と知多郡の郡境、熱田社の元社、氷上姉子社の近辺）

③ 小幡廃寺（名古屋市守山区小幡
　　山田郡の中心地、守山古墳群の拠点）

の3ケ寺である。この3ケ寺の所在する地域は、尾張氏ときわめて密接に関連する地域で、古墳時代以降の地域権力の所在したところでもある。つまり、5世紀末から6世紀初頭にかけて、尾張の南部を支配した尾張氏は、それ以降も、この地域を本貫として、他氏族の領有を許すことがなかったのではあるまいか。そして、尾張国造として尾張一国を支配し、更に、律令による尾張国が成立しても、この両郡地域は、尾張氏による独占的な支配を続けていたに違いない。むろん、律令制下に成立した尾張国においては、中央から国司を迎えるわけではあるが、尾張氏は、郡司層として、従来の基盤は温存していた。特に、愛智郡と山田郡の支配は強固であった。この地域が、古墳時代以降の大きな生産力を有しながらも、古代寺院の建立がきわめて少ないという理由は、まさにここにあるものとおもわれる。

4. 寺院と窯業

寺院の建築において、最も画期的なことは、瓦の使用である。日本で最初の寺院である飛鳥寺は、また、日本で最初の瓦葺の建築物であった。それ以降も、藤原宮までは、たとえ宮殿・官衙といえども、寺院以外には瓦を使用していない。それ故に、寺院の建築については、瓦の生産が不可欠なこととなる。

尾張で寺院の建立のはじまる7世紀後半においては、尾北古窯跡群と猿投西南麓古窯跡群が成立している。尾北窯は、6世紀初頭の下原2号窯に始まる窯業地である。下原2号窯は、春日井市味美に所在する二子山古墳の須恵質埴輪を焼成しており、その後、この窯業地が更に北方の小牧市篠岡近辺に展開し、尾北古窯跡群を形成するのである。このことから、この窯業地は、尾張北部に基盤を築いた、丹羽県主やそれに引き継がれる地方豪族によって維持されたものであったことが知られる。そして、この窯業地が展開するのは、7世紀の後半からのことである。篠岡窯からは、白鳳瓦を焼成した窯が知られており、尾張北部の寺院との密接な関係が知られる。

一方、猿投窯は、その西端に位置する東山地区で、5世紀後半から須恵器の生産が始まり、次第に発展し、東部丘陵に生産の主力が移っていく。しかし、これまでのところ、白鳳期の瓦を焼成した窯はみつかっていない。少なくとも、篠岡窯よりも大規模に窯業活動を行っていた東山窯で、瓦を焼成していないのは、この地域の寺院が少なく、寺院の近辺に設けられた瓦窯で賄うことができたためと、東山窯は、この時点においては尾張氏の私的な生産手段で、他氏族の寺院に瓦を供給する必要がなかったからではなかろうか。それに比べて、篠岡窯は、在地の勢力が弱いことや、国衙に近いということもあって、国衙の力によって経営され、近辺の小豪族の寺院に供

給する瓦を生産したのであろう。

このことは、尾張氏の氏寺と考えられる元興寺の奈良時代初期の瓦が、若宮瓦窯で焼成されていることからも窺える。おそらく、先にあげた、尾張氏の領域に建立された、元興寺・小幡廃寺・大高廃寺の3寺は、尾張氏直系氏族の氏寺として、北部地域に建立された豪族の寺院に比べて規模が大きく、それぞれが瓦窯を備えていたのであろう。尾張で最古の窯業生産を展開させてきた東山窯が、その発展期に瓦を生産しなかったのは、こうしたことによるものとおもわれる。

5. 猿投窯と土管生産

土管を出土した岩崎77号窯は、伴出遺物から、猿投窯編年における岩崎17号窯式に比定される。これは、実年代で、7世紀後半とされており、まさに尾張に寺院の出現する時である。土管は、前にも述べたように、飛鳥地方の寺院の建築と深いつながりをもっており、この土管も、いずれかの寺院建立に際して生産されたものであろう。特に、それが尾北窯ではなく、猿投窯であることから、尾張氏と縁の深い寺院であったことは間違いないところである。

尾張氏は、少なくとも、尾張最大の古墳、断天山古墳を築いたあとの6世紀代には、連の姓を有していることからもわかるように、中央と密接なかかわりをもつ、地方豪族としては抜きん出た勢力を有していた。須恵器生産が早い時期に始まるのも、中央における地位を物語っている。その権力は、継体期に最高頂に達し、尾張一国を領有することとなる。しかし、7世紀に入ると社会状況は一変し、大和朝廷は、中央集権国家への道を歩みはじめるのである。そして、それは大化改新を経て、着実に律令制国家へと移行する。日本の各地に大きな勢力を温存してきた、古墳時代以降の豪族が、中央集権国家の成員に組みこまれ、中央貴族を頂点とする官僚組織が整備されてくる。その最後に起るのが、壬申の乱である。

壬申の乱は、ある面では、古墳時代以来勢力を培ってきた地方の大豪族と、律令制の高級官僚として勢力を広げようとする小豪族の争いでもある。これは、壬申の乱の主役であった、美濃の小豪族の論功行賞からも窺える。尾張の北部に、白鳳期の寺院が集中してくることも、それと軌を一にしているのであろう。しかし、国造として勢力をふるった大豪族にとっては、支配地が郡領として分割され、せいぜいが郡司として、一地方官僚の地位に組みこまれていく過程でもあった。尾張氏にとっても、尾張国造から、愛智郡司、山田郡司へ、支配領域が狭ばめられていく転換期であった。しかし、壬申の乱における尾張国の勲功は、美濃と比肩し得るもので、それには尾張氏の働きも大きかったに違いない。おそらく、乱後における、尾張氏の氏寺、元興寺の建立にあたっては、中央から造瓦工はじめ、寺院建築の指導者、技術者が派遣されたことは間違いないであろう。岩崎77号窯における土管の生産は、ここに起因するものとおもわれる。

元興寺をはじめとする寺院建築は、さまざまな新しい技術を尾張にもたらしたことであろう。瓦生産もそうであるが、寺院で必要とされる供膳用器の生産は、東山窯の窯業を、猿投窯へと発展せしめるものとなった。元興寺の寺院建築の指導者、技術者達は、この頃滅んだ百済の人々と考えられ、当然、すぐれた窯業技術をもっていたに違いない。彼等は、瓦を生産し、須恵器を生産する中で、猿投窯の陶土を探し出していったのである。

5世紀後半以降、須恵器の生産を続けてきた東山窯では、増大してくる須恵器の需要に応ずることができなくなり、窯業地帯は東へ移る。そこが、岩崎17号窯や岩崎77号窯の築かれた岩崎地区である。この地域は、陶器生産に最適の陶土となる、瀬戸陶土層が、部分的にではあるが採

掘されるところである。まだ開発されていない低丘陵がどこまでも東へ続き、豊富な燃料と良質な陶土を提供する、この尾張東部は、渡来の陶工達にとっては、まさに理想の地であった。しかし、このことは、尾張氏にとっても、低下しつつある勢力を挽回する上で、ありがたい発見であった。尾張氏は、窯業を、基本的な生産基盤の一つにおき、この発展を図ったのである。須恵質の土管生産も、そうした意志のあらわれである。

土管を利用する暗渠排水あるいは上水道などは、それまでの日本ではみられないことであり、それ以後もあまり例がない。そして、土管の利用が、7世紀代の飛鳥地方にほぼ限定されていることは、それがきわめて特殊なものであったことを示している。それを、猿投窯で生産しようとする意志は、単に寺院の建築に必要とされる以上のものである。まして、飛鳥地方における土管が、瓦づくりを応用した瓦質のものであるのに対し、猿投窯においては、須恵質の土管であり、単なる飛鳥土管の模倣ではないのである。むしろ、この須恵質の土管の方が、本来の姿であった可能性がある。それは、元来、中央に須恵器を供給する窯業地であった陶邑が、既に衰退しはじめており、須恵器の全国的な貢納が始まる頃であり、土管については、瓦工人と旧来の土師工人の両者に頼らざるを得なかったものと考えられるからである。つまり、土管が本来、須恵質のものであるとしても、飛鳥近辺ではそれを生産することが困難であったのである。そこに登場するのが猿投窯である。

6. 猿投窯の展開

7世紀の後半から猿投窯の窯業生産は飛躍的に増大する。現在知られている古窯跡数でいえば、東山地区で始まった初期須恵器から、7世紀前半までで、36基であり、岩崎77号窯の含まれる7世紀後半の岩崎17号窯式一時期で32基となっている。(注9) ちなみに、次の岩崎41号窯式と高蔵寺2号窯式で34基が知られている。この岩崎17号窯式の窯跡は、大量生産で知られる山茶碗窯を除けば、一時期で最も大きいものである。このことからも、7世紀後半が、猿投窯の発展にとって、最も重大な時期であったことがわかる。これは、また、猿投窯の窯業生産が、尾張氏の私的生産を離れて、より広範囲な供給を目的とした窯業地帯に転換したことを物語っている。

『延喜式』によれば、尾張は、『延喜践祚大嘗祭式』『延喜斎宮寮式』『延喜民部省式』において陶器の調納国とされている。『民部省式』の規定は、いわゆる尾張瓷器で、これは、灰釉および緑釉の施釉陶器と考えられているものである。このように、尾張は、須恵器調納国とされているものの、他の調納国と比較して、その調納量は少ない。特に、中央政府までの距離が近似した備前国と比べて、格段の差がある。これは、須恵器の調納を、運搬に舟を使用できる、備前、淡路、讃岐、筑前などの、瀬戸内海沿岸諸国を中心にしているためかもしれない。また、尾張瓷器を調納しているにもかかわらず、『大嘗祭式』などに須恵器の調納を規定されている。これらのことから、尾張の窯業の一つのあり方が考えられる。それは、尾張の窯業が、古い伝統をもちながらも、新しい生産様式をもっていたということである。つまり、岩崎17号窯式1形式の間に、(実年代で示せば30年間に満ないくらいであるが)32基以上の窯が築かれており、しかもそれが、中央政府へほとんど調納されなかったのではないかということである。これまでのところ、平城宮跡の出土品でみる限り、尾張産の須恵器は、8世紀後半から出現しているといわれている。それでは、岩崎17号窯式や、岩崎41号窯式、高蔵寺2号窯式の、きわめて短期間に出現した66基以上の窯で生産された須恵器は、一体どのように消費されていったのであろうか。

同じ岩崎17号窯式の時期において、尾北窯では、篠岡2号窯1基のみが知られている。篠岡2号窯は、瓦を生産しており、その瓦は東畑廃寺（稲沢市稲島町）で使用されている。また、篠岡2号窯の近辺からは、篠岡66号窯、篠岡74号窯、篠岡78号窯などの、白鳳瓦を生産した古窯がみつかっており、篠岡窯が、寺院に瓦を供給する目的で始まった可能性が大きい。それらの瓦は、特定の寺院に付属する瓦窯としてではなく、複数の寺院に瓦を供給する、いわば公的な瓦窯であったとおもわれる。さらにいえば、それは、国衙及びそれを成立せしめる国衙周辺の郡司層によって経営されたものであろう。しかし、7世紀後半までに成立したと考えられる寺院が17ケ寺もみつかっている、庄内川以北（東）の地域に、篠岡窯だけで、供献用の須恵器を含めて、すべての窯業製品を供給することは困難であったに違いない。当然、その多くの部分が、猿投窯に需められたものとおもわれる。勿論、国衙の要請も強かったに違いないが、まだ、郡司層の力も大きかったこの段階では、実質的に猿投窯を経営していた尾張氏の意向も強く働いたのであろう。こうして、尾張においては、国衙窯的な尾北窯と古墳時代以来の伝統をひく、豪族の私的窯としての猿投窯があらわれてくるのである。その中で、猿投窯は、良質な陶土に恵まれていることから、次第に、より高級な灰釉陶器生産への道を歩きはじめるのである。

7. おわりに

岩崎77号窯で出土した土管は、これまでに類をみないもので、こうした、大建築あるいは土木工事に使用される製品の生産が、猿投窯において試みられていることは、技術の地方伝播の過程を知る上で、非常に興味ぶかいものがある。それは、中央の技術が、意外と早く、しかも、かなり細かい部分まで伝えられていることである。それには当然技術者の移動を考えなければならず、そのことによって新しい技術が、その地域においてどのように展開されていくかということを決定している。

猿投窯における窯業発展の契機は、勿論、良質な陶土の発見によるものであるが、その焼成は、従来の須恵器生産の延長上にはあらわれてこないものである。ただ単に、高火度焼成が必要というばかりではなく、採土から成形、焼成までを含めた、基本的な技術革新が必要とされるものである。そうした技術者は、やはり中央から派遣された、渡来の人々と考えるべきである。猿投窯においてそれが明らかな一つの例証として、岩崎77号窯出土の土管があるのである。

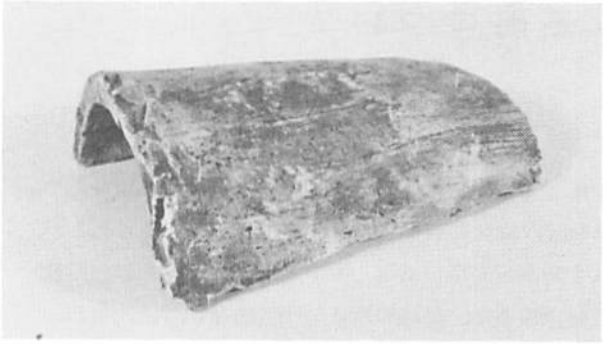
付記

本文脱稿後に、篠岡2号窯から、岩崎77号窯と同様の土管が出土している旨の指摘を受けた。篠岡2号窯は、岩崎77号窯とほぼ同時期の窯で、しかも瓦を焼成している。これは尾張の寺院建築に際して、中央からの技術者の派遣があったことを明らかにするもので、そうした技術者が、猿投窯の発展の契機となったのである。

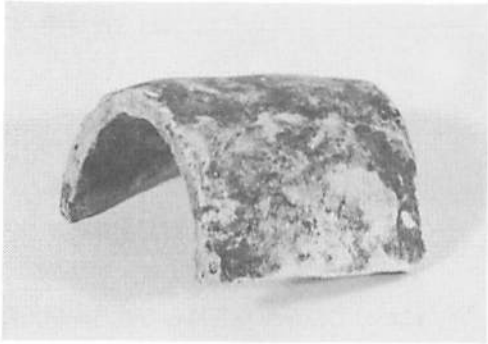
注1. 名古屋市名東区大針及び愛知郡日進町大字岩崎字芦廻間に所在する。昭和57年に、岩崎第77号窯跡発掘調査団によって調査された。報告書は未刊。

注2. 名古屋大学文学部史学科考古学研究室斉藤孝正助手によって篠岡2号窯でも同様の土管が出土していることが確認された。

注3. 「飛鳥の寺院遺跡1　―最近の出土品―」奈良国立文化財研究所、飛鳥資料館　1975年。

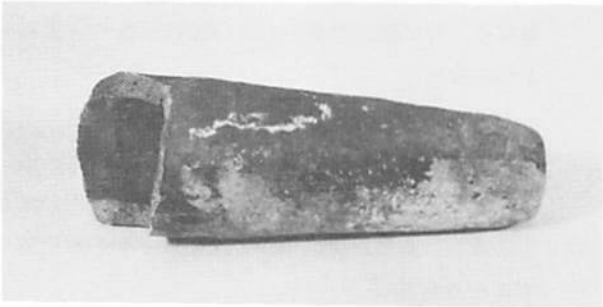


Ⅰ－77 号窯出土土管 1

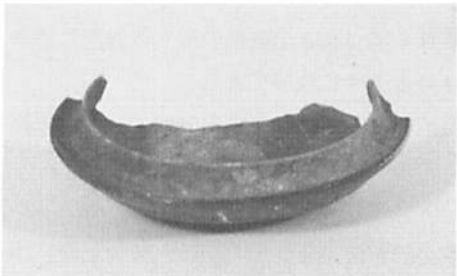


同　2

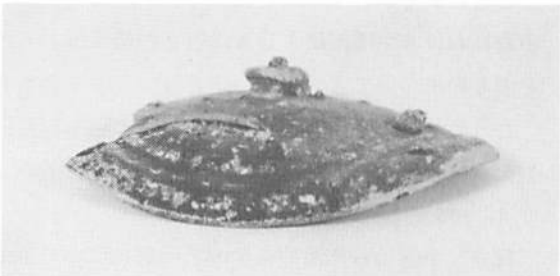
同　3



同　4



Ⅰ－77 号窯出土須恵器杯身



同　須恵器杯蓋

注 4.　斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」名古屋大学文学部研究論集　史学 29 号　1983 年。

注 5.　尾張旭市、城山窯や春日井市下原窯などでは、5 世紀末から 6 世紀初頭の須恵器を出土しているが、いずれも連続した築窯がみられず、古墳築造に伴う、一時期の生産と考えられる。

注 6.　「尾張の古代寺院と瓦」名古屋市博物館　1985 年。

注 7.　野村忠夫「古代の美濃」歴史新書＝27　教育社　1980 年。

注 8.　「一宮市史」　一宮市教育委員会　1972 年。

注 9.　斉藤孝正「猿投窯地区別・時期別古窯跡数表」　愛知県古窯群分布調査報告（Ⅲ）　愛知県教育委員会　1983 年。